

グリーンマンの森

——アインベックの聖アレクサンドリ聖堂内陣席装飾をめぐる——¹

元 木 幸 一

(山形大学名誉教授)

はじめに

アインベック (Einbeck) は、ドイツ、ニーダーザクセン地方の今は人口約3万人の小都市である。小都市とはいえ、ヴェーザー川の支流イルメ川沿いに位置するハンザ都市であった。ヴェーザー川は、実はドイツ国内のみを流れる川としては最長で、支流を含むとブレーメン、ハノーファー、ハーメルン、カッセル、フルダなどの主要都市を流れるきわめて重要な河川である。川が流通の主要経路の一つであるドイツ国内では、ライン、ドナウ、エルベの三大河川に次ぐレベルの川なのである。その中で、アインベックは13世紀以来、バルト海地方に向けた高品質のビールの特産地として繁栄した²。

そのアインベックにある聖アレクサンドリ聖堂 (St. Alexandri) 内陣席を考察するのが小論の目的なのだが、3万人の小都市の聖堂が何故に問題となるのだろうか。聖アレクサンドリ聖堂の内陣席は、次の記銘を有するがゆえにドイツ国内でもっとも重視すべき内陣席の一つとされるからである³。

「主の年1288年にハインリヒ公はこの列をなす座席を設置する。(ANNO/DNI M CCLXXXVIII/DVX HENRICVS/HAS SEDES ORDINAVIT)」⁴

この記銘 (図1) は内陣席南列西側背板の尖頭形アーチ内にラテン語で記されている。「この列をなす座席」とは、内陣席 (聖職者席) を指す。

この年記は、ドイツの内陣席の銘としてはもっとも古い。しかもこの内陣席は七百年以上もの間、本質的な変更なしにほぼ原状のまま保存されている。さらに寄進者名まで記されている。つまり、ドイツ内陣席史の確実な出発点として、きわめて重要な情報を現代に伝えてくれるのである。その意味で、これはドイツにおける教会堂内陣席の形式、モチーフ、作者、寄進者などを考察する上で、もっとも重要なものの一つであると言える。

それにもかかわらず、この内陣席に関する本格的な著作は最近までほとんどなかった。もっとも重要なロルフ・グラマツキの著書が出版されたのは、彼の没後2016年のことだった。本稿はグラマツキの著書に負いながら、この内陣席の重要性を強調し、その研究に一石を投じたいと思う。加えて、その造形の独創性を主張したい。というのは、ドイツのミゼリコルディアの中でも、このアインベック、聖アレクサンドリ聖堂のミゼリコルディアは、際立ってユニークな形式とモチーフを有しているからである。

筆者は、これまでシュヴァーベン地方ドナウ河畔のウルム大聖堂、エルベ河畔のマクデブルク大聖堂、低ライン地方のエッメリヒ、聖マルティニ聖堂などの代表的な内陣席について考察してき

¹ 小論は、2018～2020年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (研究課題「尻の下イメージ：ドイツにおける聖職者席下部彫刻ミゼリコルディアの総合的研究」課題番号18K00182) の研究成果の一部である。

² フィリップ・ドラング『ハンザ 12-17世紀』高橋理監訳、みすず書房、2016年、241, 373頁。現在でもアインベックのビールはまことに美味である。

³ アインベック、聖アレクサンドリ聖堂内陣席についてのもっとも重要な研究は以下である。Rolf Gramatzki, *Das Chorgestühl der Stiftskirche St. Alexandri zu Einbeck*, Oldenburg, 2016. 他に以下などを参照した。Elke Heege, *Münsterkirche St. Alexandri Einbeck*, Regensburg, 2000; Jörg H. Lampe, "The Choir Stalls of the Monasteries of Pöhlde and St. Alexander's in Einbeck: Observations on their Time of Origin from an Epigraphical and Historical Point of View," *Choir Stalls and their Workshops* (ed. A. Seliger and W. Piron), Newcastle upon Tyne, 2017, pp. 226-242.

⁴ R. Gramatzki, *op. cit.*, p.39.



（図1）アインベック，聖アレクサンドリ聖堂，内陣席南列西側背板，記銘
（以下，同聖堂の名称は省略する）

た⁵。これらは，14世紀から15世紀末までのドイツ各地における主要な内陣席で，そこに最初期に制作されたアインベック，聖アレクサンドリ聖堂を加えることで，考察の範囲を13世紀にまで広げ，ドイツのミゼリコルディアを中心とする内陣席の地理的・歴史的な見取図を作ることに資するだろう。

第一章 聖アレクサンドリ聖堂の建築略史⁶

アインベックの聖アレクサンドリ聖堂参事会は，1082年頃，カトレンブルク伯ディートリヒ2世により創設された。ここは伯家の埋葬所となったが，

12世紀初めにその家系は消滅し，遺産はディートリヒ2世の未亡人ゲルトルトのものとなった。ついで，その娘のゲルトルト2世がやはり相続人となる。その息子，あの著名なハインリヒ獅子公はこの聖アレクサンドリ聖堂内陣席の寄進者ハインリヒ・ミラビリス（驚嘆公）（1267～1322年）の曾祖父であった。1274年にハインリヒ・ミラビリスの父アルブレヒトはアインベックの統治権を，ついで聖アレクサンドリ参事会の守護権を獲得した。アルブレヒトの後を継いだハインリヒ・ミラビリスは領邦君主ブラウンシュヴァイク＝グラーベンハーゲン公となる。彼の力により，13世紀末から14世紀にかけてこの聖堂は新築が始まったのである。その過程で内陣席も寄進された。

現在の聖アレクサンドリ聖堂（図2）は，地方産のピンク色を帯びた砂岩を材料とした等高式聖堂（ハレンキルヒェ）である。全長71メートル，身廊の高さ16メートルで，ニーダーザクセン南部では最大の等高式聖堂である。新築に関する最古の現存記録は1290年と1313年の贖宥状である。聖堂建築の際には，寄進者への贖宥が認められる

⁵ 元木幸一「笑いと教会－ヨーロッパ中世美術におけるユーモア表現について－」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第7号，2010年，39-52頁；同「マクデブルクの二つの笑顔」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第14号，2017年，1-22頁；同『中世末期ヨーロッパ北方美術におけるユーモア表現』（平成27～29年度科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書（課題15K02132））2018年，1-48頁；同「ユニークなミゼリコルディア：エッメリヒ，聖マルティニ聖堂の内陣席装飾について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第16号，2019年，31-50頁。

⁶ R.Gramatzki, *op. cit.*, pp. 46-55; Elke Heege, *op. cit.*, pp. 2-16.



（図2）聖アレクサンドリ聖堂，西正面

のである。それゆえ，1290年にはすでに新築は進行中だったと推定される。この場合，ザルツブルク大司教，ハルバーシュタット司教，ヒルデン司教，ミンデン司教，ザムラント司教により，それぞれ40日，計200日の贖宥が承認された。

内陣席が1288年に寄進されたことからすれば，1288年から1290年までに内陣や交差部は完成したものと推定される。その後，何回かの増築を経て，最終的に現在の建築が完成したのは1506年だった。

第二章 内陣席概観⁷

内陣席（図3）は，南北各々1列9席が設置されている。台座の規模は以下の通りである。長さ577cm，奥行き98～103cm，高さ21cm，椅子の天蓋までの高さ約284cmである。蝶番付き座板の長さは41～42.5cmで，その下にミゼリコルディアが取り付けられている。

座席の仕切り（図4）はそれぞれ約100cmの高さであり，二箇所に球形の上部肘掛と下部肘掛が付けられている。肘掛の直径はほぼ8～10cmである。上部肘掛の上には輪形の肩部が付けられ，その背後には背板が加えられている。背板の上方は，尖頭形アーチとなっている。アーチを支える細い支柱の柱頭には，植物や人物などの文様が彫られている。また尖頭形アーチの間，支柱上部にはピラミッド形屋根の塔が載っている。さらに南



（図3）内陣席南列



（図4）内陣席北列，西から

北座席の東西両側の側面板には，ドラゴン，へび，植物文様などの装飾がある。最上部では，鋸歯状の天蓋が被さっている。

これら座席の材料はオーク材である。

まとめると，ミゼリコルディアには南北各々9種，合計18種のモチーフがあり，肘掛は，上部下部が南北それぞれ8個で合計32個のモチーフ，支柱柱頭には，南北各10個で，合計20個のモチーフ，南北座席，東西両側側面板には4面の装飾が付属している。総計74ものモチーフでできている内陣席のモチーフ分析は後ほど詳述する。

⁷ R.Gramatzki, *op. cit.*, pp. 17-22.

第三章 内陣席の寄進者⁸

先に述べたように、寄進者はブラウンシュヴァイク＝グラーベンハーゲン公ハインリヒ・ミラビリスである。この「ミラビリス」という通称は「驚嘆公」という意味だが、人々を驚かすほど優れた人なのか、変人という意味なのかは不明である。

いずれにせよハインリヒは、起源をたどれば、ザクセン公やバイエルン公を務めた強大なハインリヒ獅子公（1129–1195年）（図5）の子孫の一人である。その後、同家はハインリヒ・ミラビリスの祖父の代にブラウンシュヴァイク＝リュネブルク公家となるが、父アルブレヒト1世の代には二つに分割され、父はブラウンシュヴァイク公を相続した。ザクセン領では、長男相続法ではなく、聖職者以外の男子による分割相続が習慣となっていた。アルブレヒトには6人の男子がおり、ハインリヒ・ミラビリスは長男で、分割相続すべき男子2名はいずれもドイツ騎士団の騎士となることで、分割から除外された。その後の複雑な抗争を経て、ハインリヒ・ミラビリスは都市アインベックとグラーベンハーゲン城を獲得した。つまりハルツ山地南西の領土を手に入れたのである。こうして彼はブラウンシュヴァイク＝グラーベンハーゲン公となったのである。



（図5）《ブラウンシュヴァイクの獅子》ブロンズ、1160年代、ブラウンシュヴァイク、ダンクヴァルローデ城

彼は、領土となったアインベックのために教会や修道院を整備した。聖アレクサンドリ聖堂は司教座聖堂首席助祭の教会へと昇進した。また、13世紀初めに創設された施療院を改革し、アウグスティヌス隠修士会修道院にアインベックに定住する特権を付与した。マグダラのマリア女子修道院も設立した。聖アレクサンドリ聖堂内陣席の寄進は、このようなアインベックに宗教施設を充実させる施策の一環だったのである。聖堂の内部装飾への寄進は、守護者によることが多かったのである。

ハインリヒ・ミラビリスは、マイセン辺境伯アルブレヒト2世の娘アグネスと結婚し、16人の子をもうけた末に、1322年アインベックの隣町ザルツデアヘルデンで亡くなり、聖アレクサンドリ聖堂の地下祭室に埋葬された。

第四章 作者⁹

アインベック、聖アレクサンドリ聖堂内陣席と密接な関係を有するのは、同じニーダーザクセン南部（ハルツ山地南部）ペールデ（Pöhlde）参事会聖堂の内陣席だろうと考えられている。16世紀末にニーダーザクセン南部地域を旅した聖職者ヨハネス・レッツナーは、ペールデを訪問して参事会聖堂に12預言者像と12使徒像のある内陣席を見つけたと記録している。その内陣席は1284年に制作されたのだが、部分的に破壊されていると。これらの内陣席は、現在10枚ほどのパネルに分割されてハノーファー、ニーダーザクセン州立美術館などに収蔵されている¹⁰。両作品を比較すると、球体に近い肘掛けや記銘の字体などの点できわめて

⁹ 作者に関しては、R. Gramatzki, *op. cit.*, pp. 24–34とJörg H. Lampe, *op. cit.*, pp. 226–242参照。

¹⁰ ただし、ニーダーザクセン州立美術館では、この10枚パネルを農民戦争後、16世紀半ばに作り直されたものとしている。それはW. グラーペの研究に基づく。Wolfgang Grape, “Das Rätsel der Chorgestühle von Pöhlde, Einbeck und Ilfeld”, 1. und 2. Teil, *Niederdeutsche Beiträge zur Kunstgeschichte*, 42 (2003), pp. 35–174; 43/44 (2004/05), pp. 93–134. 筆者はラムペ説にない、このグラーパー説を否定し、アインベック聖アレクサンドリ聖堂内陣席の記銘に基づき、13世紀末の制作と考える。

⁸ 寄進者については、R. Gramatzki, *op. cit.*, pp. 34–39.

類似している。ちなみに、ハノーファー、州立美術館のパネルは、年輪年代測定法によると、伐採年は1280～1290年と推定されるという¹¹。

加えて、この地域の三組座席におけるドラゴン（プフォルタ、修道院）（図6）、ペールデ参事会聖堂内陣席のドラゴン（現在は、ゲッティンゲン市立美術館）（図7）、アインベック、聖アレクサンドリ聖堂内陣席ドラゴン（図8）の驚くべき類似性からも、これらが同一工房で制作されたと思われる。13世紀末から14世紀初めのニーダーザクセン南部にユニークできわめて有能な木彫家（あるいは指物師）の工房があったと推測されるのである。



（図6）《ドラゴン》プフォルタ，修道院聖堂

この工房を経営した親方をグラマツキは「ペールデの親方（Pöhlde Meister）」と呼んだ¹²。この親方は、他にもノルトハウゼン大聖堂、イルフェルト、聖ゲオルクーマリア聖堂など、この地域の多くの聖堂内陣席を手がけたと考えられている。

¹¹ Jörg H. Lampe, *op.cit.*, pp.233-234.

¹² R. Gramatzki, *op. cit.*, pp.41-44.



（図7）《ドラゴン》ゲッティンゲン市立美術館



（図8）《ドラゴン》内陣席南列側面板



（図9）《木彫家工房自刻像》（ペールデ内陣席部分），ハノーファー，ニーダーザクセン州立美術館

幸運なことに、この「ペールデ親方」の姿と思われる木彫浮彫が現存する（図9）。先ほど指摘したハノーファー、ニーダーザクセン州立美術館の10枚パネルの一つなのである。ペールデ参事会聖堂内陣席は南北各12席だが、その北列西側の側面板外面に木彫家工房の様子が彫られている。尖頭形アーチの下に剃髪された男が椅子に腰掛け、右手に槌、左手に鑿をもって、この側面板そっくりの板を作業台の上で彫っている。円形の肘掛け二つが、まさしくこの側面板と符合するのである。ということは、この側面板は、ちょうどこの内陣席を制作中の親方の自刻像ということになる。親方の作業台の上には6本の鑿、壁にはコンパスと

直角定規がぶら下がっている。この職人は、髪型から判断すると修道士なのだろう。当時、修道院に属する修道士の職人は、例外的に他の聖堂で仕事することも許されていたのである。あるいは、この職人は木彫家というよりは指物師の修道士かもしれない。13世紀というかなり早い時期の自刻像である。

この場面で目立つのは、尖頭形アーチのすぐ下にある大きな花のような模様である。一列目に3葉、その下には6葉がある。これはグラマツキによれば、センベルビウム（Donnerkraut）という植物を示すという。この植物は、中世の民衆信仰では稲光りや雷鳴（Donner）から守るとされ、この植物の印は雷などを避けるための魔除け、厄除けの効果を持つと信じられていたのである。雷は修道院や教会というような大規模建築と関連する。この頃、大規模建築にとって恐ろしいのは雷だった。実際、ペールデの町で1017年当時あった皇帝館が、落雷で出火し、焼け落ち、隣にあった修道院へも延焼した。その修道院は、12世紀、13世紀

にも火事にあっただろう。これほど頻繁に火事にあっている町の修道院に住む親方の印としては、なるほど、この植物は相応しいものだったのかもしれない。雷から建物を守る職人親方の印なのだろう。火事で真っ先に焼けるのは木材の部分である。それゆえ木工職人の親方として雷、ひいては火事からの護符として、この植物マークがつけられたと考えられるのではあるまいか。

さて、先に述べた16世紀末にニーダーザクセン南部を旅行し、記述したヨハネス・レッツナーは、ペールデ参事会聖堂内陣がおそらくペールデの修道士により作られたと述べている。ペールデは、ハインリヒ・ミラピリス公領に属していたという

ことから類推すれば、アインベックの支配者でもあった公が、聖アレクサンドリ聖堂内陣席を創設しようとした際、当時自領でもっとも多くの仕事をしていたこの「ペールデ親方」に依頼するのは、きわめて普通のことではないだろうか。

第五章 ミゼリコルディア

では具体的に内陣席を観察しよう。まずは座席下部の座板裏装飾ミゼリコルディアから始める。便宜的に北列の主祭壇側（東側）から「北1」、さらに南列主祭壇側から「南1」と番号をつけよう¹³。

北1（図10）は「眉毛としてのアカンサス蔓のある髭面葉状仮面」である¹⁴。顎鬚、口髭などに囲まれた仮面だが、目は鋭く、鼻と口は小ぶりで、特徴的なのは長く横に伸びた眉毛である。その眉毛は末端でくると巻いた蔓状のアカンサスに化ける。このような植物要素のある仮面は「葉状仮面（Blattmaske）」と呼ばれている。「葉状仮面」の多さはこの内陣席の際立った特徴である。

北2（図11）は「翼を広げた鷲」であり、頭部はプロフィールで表されている。顔は斜め上方を向いている。天を目指して飛んでいく姿だろう。翼や羽の細部、目の向きや嘴の微妙な表現も巧みに彫られている。鷲は多彩な意味を有し、解釈は困難だが、セビーリャのイシドルス『語源考』による「眼の鋭さのおかげで、鷲は遠くの獲物を発見し、太陽を直視することができる特性」をもち、時期的な理由から皇帝との関係をあげておこう¹⁵。1254年から1273年までは大空位時代と呼ばれ、鷲の紋章が皇帝との関係で用いられることがなくなったが、1273年にハプスブルクのルドルフ1世

によって、鷲の紋章が復活したことにより、従来とは異なる特別な意味を有するようになったのである。もちろん単頭の鷲である。この複雑な時代の皇帝支持の表象であろうか。



（図10）ミゼリコルディア北1



（図11）ミゼリコルディア北2

北3（図12）は、「4分の3観面の修道士胸像」である。この修道士は唇を開いて笑みを浮かべている。聖堂参事会員だろうと推定される。

北4（図13）は「額の上がった男性胸像」である。胸元では十字花のブローチでマントを留めている。髪には櫛が入れられ整えられている。彼も高位聖職者の聖堂参事会員だろう。

北5（図14）は、「アネモネの葉状仮面」である¹⁶。仮面下部からアネモネの茎が交差して四角形をなし、2枚の葉が仮面の左右を覆っている。さらに額から1枚の小さな葉が頭上へと伸びてい

¹³ なお、筆者は植物学に疎く、植物の同定には自信がないので、グラマツキ著書と以下に基づく。Lottlisa Behling, *Die Pflanzenwelt der mittelalterlichen Kathedralen*, Köln-Graz, 1964.

¹⁴ 教会美術における植物表現の研究に関しては、上記したL. ベーリングの著書がもっとも重要である。アカンサスに関しては以下のページを参照。Lottlisa Behling, *op. cit.*, pp. 4-9.

¹⁵ アラン・ブロー『鷲の紋章学 カール大帝からヒトラーまで』松村剛訳、平凡社、1994年、42-43, 87-88頁。

¹⁶ L. Behling, *op. cit.*, p. 106, Abb. CIII.



（図12）ミゼリコルディア北3



（図13）ミゼリコルディア北4



（図14）ミゼリコルディア北5



（図15）ミゼリコルディア北6

る。良く似た形体が北8，南1にも見られる。アネモネはキリストや聖人の流れる血を象徴する。聖アレクサンドリ聖堂の洗礼礼拝堂は従来聖血礼拝堂と呼ばれ，ここにはキリスト聖血の聖遺物が保存されており，多くの巡礼者が訪れていた。このほぼ同じ図柄が3つもあるのは，この聖遺物を重視するが故であろうか。アネモネの多さも同じ理由であろう。

北6（図15）も「アネモネの葉状仮面」だが，葉の一片が小鼻に接触する。頭髮は整然と梳られている。

北7（図16）は「先が渦巻く葉のような帽子を被る男性胸像」である。帽子から，長い巻き毛が

垂れているのが見える。

北8（図17）は，「アネモネの葉状仮面」で，先に述べたように北5，南1と類似している。ただし，容貌は微妙に異なり，北5に比べると目尻が上がり，きつい表情に見える。

北9（図18）は「つば広帽子を被った巻き毛の男性胸像」で，マントを丸いブローチで留めている。この帽子は枢機卿用帽子に似ているが，垂れ下がっている長い巻き毛から考えると世俗市民の可能性もある。12世紀以来商人などもこのようなつば広帽子を被ったという。

南1（図19）も「アネモネの葉状仮面」で，北5，北8とほとんど同図柄である。やはり顔の特



(図16) ミゼリコルディア北7



(図17) ミゼリコルディア北8



(図18) ミゼリコルディア北9



(図19) ミゼリコルディア南1



(図20) ミゼリコルディア南2



(図21) ミゼリコルディア南3



（図22）ミゼリコルディア南4



（図23）ミゼリコルディア南5



（図24）ミゼリコルディア南6



（図25）ミゼリコルディア南7

徴は微妙に異なり、この目の位置は北5より、やや下である。また口の表情は柔和で微笑にも見える。

南2（図20）は「上流階級既婚女性の笑う胸像」である。大きなベールが、耳から顎まで覆っている。ぴったりしたV字型襟ぐりの衣装を身につけている。上唇と下唇の間に隙間が空いており、口角がやや上がっていることから、笑っているように見える。南列にはもう一つ女性胸像があり、ほかに南下部肘掛けに二つ、さらに北支柱柱頭の一つの女性像がある。支柱柱頭を除いては4つがいずれも南に位置しているのである。これらは寄

進者の妃や娘などの関係者、あるいは修道女であろう。ここでは、華やかなベールと衣装から判断して、寄進者の妃、あるいは公家の高貴な婦人かもしれない。

南3（図21）は「鼻からアネモネの葉が生える葉状仮面の胸像」である。マントを十字型のブローチで留めている。長髪で梳られた跡が明快である。葉の根元と鼻が一体化して、斜め上方に伸び、鼻から葉が自然に生えているように見える。

南4（図22）は「口からアカンサスの蔓が伸びる葉状仮面」である。隣の南3がアネモネの葉が鼻から生えるのに対し、この場合は口から、アカ



（図26）ミゼリコルディア南8



（図27）ミゼリコルディア南9

ンサスの蔓が上に伸び、額の上でくると巻きあがっている。目はきつく、口から植物が生えることで、不気味な表情を生み出している。

南5（図23）は「アネモネの葉が眉から伸び口を覆う葉状仮面」である。アネモネの葉がマスクのように額から口を覆い、そのマスクによってキツネ目が強調される。ここでも上下に梳られる髪が頭から伸び、下方に流れる長髪である。

南6（図24）は「カエデの葉で鼻と口が覆われる葉状仮面」である。髪は頭頂から両脇に分けられている。カエデの葉は大きく、口の全体と鼻の半分以上を覆い隠している。ここでも目がきつく

目立っている。ここ南3～6は多様な形式の葉状仮面が連続しているのである。

南7（図25）は「パールで髪を覆い、マントをブローチで留めている女性胸像」である。この女性とは南2（図20）の女性と違って、耳までパールで覆っていない。両耳ははっきりと見えている。修道女であろうか。内陣席にも修道女は座を占めていたであろう。特に、寄進者ハインリヒが設立したマグダラのマリア修道院の修道女であろうか。

南8（図26）は「頭頂からアカンサスの蔓が下がり、頬を隠している葉状仮面の胸像」である。彼もマントを身につけ、丸いブローチで留めている。ここにも葉状仮面が登場する。南列は9席中6席で葉状仮面が表されている。

南9（図27）は「大天使ミカエル」だろう。十字形ブローチでケープのようなタッセルマントを留め、騎士のような格好をしている。この翼は北2（図11）の鷲の翼ほど繊細ではないが、翼の質感は十分に感じさせる。この天使が大天使ミカエルと推測されるのは、騎士のような姿に由来する。ミカエルは最後の審判で魂を測り死者の運命を決定する役目を担っている。かつ悪魔と戦う騎士である。隣の側面板の装飾がドラゴンであることから考えると、最後の審判に関連するので、大天使ミカエルと推定される。

モチーフに関して全体的にまとめると、まず葉状仮面は北列に4席、南列に6席ある。つまり全18席中10席が葉状仮面である。男性胸像は北列に4席で、南列にはない。女性胸像は北列にはなく、南列には2席ある。北列には鷲が1席、南列には天使が1席である。形式については、頭部だけの仮面が北列南列に各4席、計8席であり、胸像が北列南列各5席、計10席である。こうしてみると明らかに北列と南列でそれぞれ男女を別々に配し、鷲と天使という性格の異なったイメージを配していることが分かる。

これらミゼリコルディアと他の部分の関連をも考えながらさらに分析して行こうと思う。

第六章 肘掛け

次に検討するのは、南北それぞれ8箇所にある、席と席の間の仕切りの上下に付いている球体の肘掛けである。仕切りの上下二箇所に肘掛が付いているのは独特である。ここでは南北席でそれぞれ16個、合計32個の肘掛モチーフを分析したい。ミゼリコルディアと同様に、北列主祭壇側の上部肘掛から北肘上1、下部肘掛は北肘下1などと番号をふって記述する。

ではまず北肘下1（図28）から始めよう。小鼻からアカンサスの蔓が左右斜め上方に、また別のアカンサスの蔓が眉間から真上に伸び、頭頂に至っている葉状仮面である。小鼻から植物が伸びているという点では南3ミゼリコルディア（図21）と似ているが、南3ではアネモネであるのに、こちらはアカンサスなので印象はだいぶ異なる。さらに球体なので、左右に伸びた蔓は球体に沿っている。口を大きく開けて笑っているように見える。隣の北1ミゼリコルディア（図10）も眉間から眉毛に沿って伸びるアカンサスの葉状仮面であり、表情は異なるが、この二つは対をなしているように見える。



（図28）肘掛 北肘下1



（図29）肘掛 北肘上1

その上にある北肘上1（図29）はやはりアカンサスの葉と蔓が組み合わされた球体の握り状の形体である。下の肘掛と対になっているのだろう¹⁷。

北肘下2（図30）はフードを被った修道士頭部である。ここでは左隣の北3ミゼリコルディア（図12）が同じようなフードを被っている修道士なの



（図30）肘掛 北肘下2



（図31）肘掛
北肘下3

で、ここでも隣のミゼリコルディアと対になっている。しかもこのミゼリコルディアの修道士は向かって右を向いている。つまりこの肘掛の修道士の方向を向いているのである。

北肘上2はキンボウゲ科¹⁸の葉状装飾である。

北肘下3（図31）は口髭と顎鬚の老人頭部像である。ビレッタ帽を被っている点から考えると、貴族だろうか。

北肘上3はプリオニアの植物装飾¹⁹と、その上にアネモネの花模様がある。

北肘下4（図32）は顔の両側面をアカンサス、額をクワガタソウが囲む葉状仮面である。口の表情から笑っていることがうかがえる。

北肘上4はキケマン²⁰の葉状装飾である。このキケマンは薬草である。

北肘下5（図33）も大きなキケマンの葉で左右を覆われた葉状仮面である。頭部は大きな花を被っている。



（図32）肘掛 北肘下4



（図33）肘掛 北肘下5

¹⁷ 上部肘掛はすべて葉状装飾で植物の種類が異なるだけなので、以下図版は省略する。

¹⁸ L. Behling, *op. cit.*, pp. 77, 105.

¹⁹ *Ibid.*, p.88.

²⁰ *Ibid.*, pp. 91, 107.

北肘上 5 では渦巻き状の葉状装飾である。

北肘下 6（図34）では左右両脇に野ばら²¹の花がついている葉状仮面である。

北肘上 6 はアカンサス葉状装飾である。

北肘下 7（図35）は、クサノオウが頭頂を覆い、左右両面は渦巻きとなっている葉状仮面である。

北肘上 7 は野ばらの葉状装飾である。

北肘下 8（図36）はアネモネの葉が顔中を囲む葉状仮面である。鼻、口周辺はやや損傷を受けている。

北肘上 8 は、ベトニーの長い葉が球体の中央を覆う葉状装飾。



（図34）肘掛 北肘下 6



（図35）肘掛 北肘下 7



（図36）肘掛 北肘下 8

南肘下 1（図37）では、縮毛の婦人がひだ飾り付きのベールで縁を飾り、ほのかに笑っている。

南肘上 1 は、スグリの葉状装飾である。

南肘下 2（図38）は、頭巾を被り、顎髭を伸ばし、前髪を額で揃えた髪型である。その頭部は、北肘下 3（図31）の老人に似ている。

南肘上 2 は、チシマオドリコソウの葉状装飾である。



（図37）肘掛 南肘下 1



（図38）肘掛 南肘下 2

南肘下 3（図39）は、頭上にアネモネの葉を被り、耳の両脇をアカンサスで覆う葉状仮面。アカンサスの蔓は口から生えている。左右のミゼリコルディアつまり南 3 と南 4 も口と鼻から蔓が伸びるモチーフである。つまり 3 つ連続で植物が口、鼻から生えているのである。



（図39）肘掛 南肘下 3

南肘上 3 は、ブリオニアの植物装飾。

南肘下 4（図40）は、頭巾をかぶった上流の女性である。耳、顎の下などに帯が掛けられている。ミゼリコルディア南 2（図20）と似た女性である。

南肘上 4 は、キンボウゲの植物装飾である。

南肘下 5（図41）は、チシマオドリコソウが頭上から垂れ下がっている葉状仮面である。

南肘上 5 は、渦巻き状の植物装飾である。

南肘下 6（図42）は、笑う修道士を表す。頭髪は丸くカールしている。フードは顎の下に降ろされている。

南肘上 6 は、アネモネの葉状装飾である。

21 Ibid., p. 68.

南肘下7（図43）は、おかっぱ頭に顎の下で結ぶボンネット帽子を被った男である。

南肘上7は、渦巻きの上に、ケシの花が載った植物装飾である。

南肘下8（図44）には、冠を被った貴族がいる。彼も笑っている。

南肘上8は、オダマキの植物装飾である。

まとめると肘掛下部は顔のある仮面であり、肘掛上部はみな顔のない植物装飾である。さらに北列には貴族が1名、修道士が1名、南列には貴族が1名、婦人が2名、修道士が1名いる。合計で、貴族、婦人、修道士が各2名ということになる。



（図40）肘掛 南肘下4



（図41）肘掛 南肘下5



（図42）肘掛 南肘下6



（図43）肘掛 南肘下7



（図44）肘掛 南肘下8

第七章 支柱柱頭

次のモチーフ研究は支柱柱頭である。座席仕切りを上に伸ばした支柱の尖頭形アーチ付け根に柱頭があり、そこにも興味深いモチーフがあるのだ。北列、南列各々10種類ずつ、計20のモチーフである。やはり北列の主祭壇よりを北柱頭1と呼ぶことにしよう。

北柱頭1は、茎もついたアネモネ葉である。

北柱頭2（図45）は、高く上に伸びる頭髪の笑う男性。煉獄に向かう死者だろう。

北柱頭3（図46）は、アネモネの葉状装飾である。

北柱頭4（図47）は、植物風飾りのついた帽子を被った婦人仮面で、笑っているように見える。

北柱頭5は、キツタの冠を被る、笑う若い男の仮面。

北柱頭6（図48）は、三つ葉のクローバーが数葉組み合わせた葉状装飾である。



（図45）北柱頭2



（図46）北柱頭3



（図47）北柱頭4



（図48）北柱頭6

北柱頭 7（図49）は、枝付きのサンザシが覆う男性仮面である。

北柱頭 8 は、カンアオイの葉状装飾。

北柱頭 9（図50）は、翼のある守護天使仮面である。

北柱頭10は、一本の三つ葉のクローバーである。



（図49）北柱頭 7



（図50）北柱頭 9

南柱頭 1 は、枝付きサンザシ。

南柱頭 2（図51）は、実が付いたブドウの枝と葉である。

南柱頭 3（図52）は、鼻から蔓が伸びる、ロバの耳付きの男性仮面である。阿呆仮面ということになる。

南柱頭 4 は、ホップの葉状装飾。

南柱頭 5（図53）は、ユダヤ人帽を被った髭のある男性仮面とアネモネである。おそらくユダヤ人が寄進者に加わっているか、寄進者に費用を融通していたのであろう。ユダヤ人が教会建築の資金を融通するのは珍しくない。

南柱頭 6 は、マルメロの花と葉の装飾。

南柱頭 7 は、頭上のコブカエデと男性仮面。

南柱頭 8 は、どんぐり（ナラ、カシワ）の実のある葉状装飾。

南柱頭 9（図54）は、翼を広げ立っている鷲。

南柱頭10は、一本の三つ葉のクローバー。



（図51）南柱頭 2



（図52）南柱頭 3



（図53）南柱頭 5



（図54）南柱頭 9

第八章 側面板装飾

南北両列の東西両側面板にある合計 4 枚に大きな装飾がある。内陣席の最後にこれらを観察しよう。

南列東側（主祭壇側）（図55）には、アカンサスと合体した蛇が現れる。最下部に蛇の頭があり、ちょろちょろと舌を出している。墮罪、原罪と関係するモチーフだろう。

その向い側、北列東側（図56）の植物文様は、グラマツキによれば南列側面板のアカンサスと同じとされるが、渦巻き状の葉が明らかに異なり、他の部分と比較検討することで、アネモネだろうと判明する。とすると、キリストの血、すなわち犠牲を象徴するだろう。南に原罪の象徴、北にその贖いとしてのキリストの犠牲の象徴が表されているのである。最下部には男性頭部像（図57）がある。長髪に八角形の冠を被った若者である。表情は凜として、かすかに笑みを浮かべている。こ



（図55）側面板南列東側



（図56）側面板北列東側



（図58）側面板南列西側



（図59）側面板北列西側



（図57）側面板北列東側下部頭部像

の位置は内陣席で最も主祭壇に近い場所であることからすれば、寄進者ハインリヒ・ミラビリスと推定される。人類はキリストの恩寵下の時代に生きているのである。

南北両列の西側には、ともに有翼のドラゴンがいる。犬のような頭部、頑丈な歯、長く尖った耳である。そして共に何かを口から吐いている。南列ドラゴン（図58）が水、北列ドラゴン（図59）が炎なのである。聖書でドラゴンが登場する最もよく知られたのが『ヨハネ黙示録』であることから考えれば、南列のドラゴンは、黙示録の女に向けて水を吐く竜であり（『ヨハネ黙示録』12：15）、炎を吐くドラゴンは天から地上へ火を降らせる竜だろう（『ヨハネ黙示録』13：11-15）。つまり最後の審判と関連するドラゴンなのである²²。

²² 中世ドイツのドラゴン（竜）に関しては、以下の書が重要である。そこでは次のように述べられる。「中世ドイツでもっとも重要な動物のデーモンといえば、おそらく竜である。」（24頁）「中世ドイツでは、ヨハネ黙示録の影響は想像以上に大きかった。」（26頁）ヴィルヘルム・ポイカート『中世後期のドイツ民間信仰 伝説の歴史民俗学』中山けい子訳、三元社、2014年、24-44頁。

こうして側面板装飾は、原罪の発生とそのキリストの犠牲による贖い、そして最後の審判というように、キリスト教の主要な時代、歴史が表現されているのである。

さらに述べると、竜はゲルマン文化では墓を守る存在とされていた。パトリック・ギアリのいうところによれば、「墓から出てくる竜は、死者を断罪するのとは別の意味を持っていたと考える必要がある」²³。そうだとすれば、内陣の下部が寄進者家系の墓所となっていることから考えて、この竜は、墓を守る役割を担っていたとも推測されるのではあるまいか。

ちなみに側面板装飾は、1230年頃に描き始められたと思われる『ヴィラル・ド・オヌクルの画帖』にも、三箇所になたてそのデザインが現れる²⁴。中にドラゴンが登場するのは一箇所（図60）である²⁵。このドラゴンについて藤本康雄は「悪鬼」の化身という、民俗学的な解釈をしている。このドラゴンは上を向き、上っていくように見えるが、この画帖では同じ頁内の図柄の向きが必ずしも同じ方向ではなく、これが上に向いているかどうかは不明である。したがって、一見する

²³ パトリック・ギアリ『死者と生きる中世 ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷』杉崎泰一郎訳、白水社、1999年、88頁。

²⁴ 藤本康雄『ヴィラル・ド・オヌクルの画帖に関する研究』中央公論美術出版、1991年。

²⁵ 同書、図版12、35-37頁。

とアインベックのドラゴンとは異なるが、教会内のドラゴンであることを考えればやはり『黙示録』との関連を指摘するのが妥当だろう。

『ヴィラルール・ド・オヌクール』では他に2点の側面板装飾のデッサン（図61）があるが、いずれも藤本が「唐草模様」と呼ぶ植物文様で飾られている。ただし、藤本の記述ではこれが内陣席の外側の側面板であることが意識されていないように思われている²⁶。一つ一つの座席の仕切りと考えているように思われるのである。しかし、そうだとすると肘掛が描かれていないのは不自然である。ゆえにこれも側面板装飾とみなすべきだろう。



（図60）『ヴィラルール・ド・オヌクール』1230年頃、図版12



（図61）『ヴィラルール・ド・オヌクール』図版57

第九章 グリーンマン

最後に、グラマツキ研究で深く追究されなかった要素がある。それは、この内陣席でもっとも際立ったモチーフとしての顔と植物が合体した模様（葉状仮面）である。本章では、その葉状仮面について考察しよう。葉状仮面を内陣席以外で探すと、典型的な例が交差部天井要石（図62）に見られる。円形の中央にオークの葉に囲まれた顎鬚の男性仮面がある。周囲が緑で彩色されることで、いかにも植物と人間の顔の合体したイメージと

²⁶ 同書、図版54, 57, 106-111頁。

なっている。このような葉状仮面を通常は「グリーンマン (green man)」と呼ぶ²⁷。英語では他に「木の葉で覆われた顔 the foliate head」、フランス語では「木の葉の仮面 le masque feuillu」あるいは「木の葉男 le feuillu」または「緑の男 l'homme vert」、ドイツ語では「葉状仮面 Blattmaske」や「緑の男 der grüner Mensch」などと呼ばれ、祭りなどに登場する全身を木の葉で覆った化物あるいは人物を指していた²⁸。



（図62）交差部天井要石〈グリーンマン〉

この内陣席では、側面板を除くと、すべてで70のモチーフのうち、25がグリーンマンのモチーフである。それは顔のない葉状装飾と同数であり、人物イメージなどより多数なのである。したがって、この内陣席では70モチーフ中50に植物モチーフが使用されており、この内陣席のイメージは総じて植物に囲まれた人物、あたかも繁茂した森の中の人間ということになろう。それに鷲と天使がほんの少し加わっているだけなのである。小論のタイトル「グリーンマンの森」はここに由来する。

アンダーソンは、グリーンマンの形式を三つに分類している。第一に、木の葉の仮面。つまり一枚の葉、あるいはたくさんの葉で覆われた男の顔

²⁷ グリーンマンについては以下の書を参照した。ウィリアム・アンダーソン『グリーンマン ヨーロッパ史を生きぬいた森のシンボル』板倉克子訳、河出書房新社、1998年；伊藤進『森と悪魔 中世・ルネサンスの闇の系譜学』岩波書店、2002年；ヴィル・エーリヒ・ポイカート、前掲書。

²⁸ W. アンダーソン、前掲書、29頁。

である²⁹。第二に、「植物を口から、時には耳や目から吐き出している男の顔³⁰」である。第三に、「果実、または花でできた顔」である³¹。この分類を、聖アレクサンドリ聖堂内陣席に当てはめてみよう。

第一分類は、ミゼリコルディアでは北1（図10）、北5（図14）、北6（図15）、北8（図17）、南1（図19）、南6（図24）、南8（図26）の七箇所である。肘掛では北肘下4（図32）、北肘下5（図33）、北肘下6（図34）、北肘下7（図35）、北肘下8（図36）、南肘下3（図39）、南肘下5（図41）と七箇所であり、北列肘掛下部が多い。また、支柱柱頭では、北柱頭4（図47）、北柱頭5、北柱頭7（図49）、南柱頭3（図52）、南柱頭5（図53）、南柱頭7と六箇所である。計20箇所となる。

第二分類に関しては、この内陣席に合わせて若干の修正を加えよう。アンダーソンは植物が口、耳、目から出ているものとしているが、それだけではなく鼻や眉から出ているものも含めよう。ミゼリコルディアでは、植物が鼻から出ている南3（図21）、口から出ている南4（図22）、眉から伸びている南5（図23）がある。肘掛下部では口から出ている北肘下1（図28）と南肘下3（図39）がある。計五箇所である。

第三分類はこの内陣席には見受けられず、典型的な作例としてはジュゼッペ・アルチンボルドの絵画などに見出される。

では、グリーンマンとは、どのような存在なのだろうか。アンダーソンは古代以来の森の神としている。だが小論では古代まで範囲を広げず、ロマネスク以来の聖堂内に登場する植物に囲まれた顔（仮面）、あるいは口から植物を吐き出すなど、植物と密に接触する顔（仮面）をグリーンマンとして扱うことにしよう。これに関して伊藤進は「ヨーロッパの深い森の記憶を留め、森の尽きせぬ生命力を反映している」ものであり、さらに言

えば、「あらゆる生を貪り吐き出す時間を、つまり死と再生という豊穡な生命の運動を意味する」という³²。アンダーソンも同様に「抑えきれない生命力の象徴」であるという³³。

良く似た存在に「野人」があるが、この野人とグリーンマンの関係はどうなのだろう。野人は英語で wild man, フランス語で homme sauvage, ドイツ語で Wildemann などと称される。野人とは、基本的には、森に住む邪悪な存在とされていた。中世末期、15世紀末のシュボンハイムの大修道院長ヨハネス・トリテミウス（1462–1516年）によれば、次の6つの種族がいるという。第一に火の精と呼ばれ、燃える悪魔である。山火事を引き起こす。第二に空気の精と呼ばれ、雷や暴風雨を降らす悪魔である。第三は地上の悪魔で、狩人などに悪さをする。第四の悪魔は水の精と呼ばれる。水辺に棲み、海上の暴風雨を起こして船を沈没させる。第五は地中の精と呼ばれ、井戸掘り人、坑夫など地中で働く人を狙う。第六の邪悪な妖精は光を恐れる精と呼ばれ、夜に歩き回る。暗闇で人を襲うのである³⁴。これらの野人たちは、ドイツ中に存在し、ヘッセン、アイスフェルト、エガーラントなどの諸地方やハルツ、シレジアの山林地方、アルプスなど遠く東方に至る地域で様々な名前前で呼ばれるという³⁵。

グリーンマンは聖堂内に姿を表し、大概是頭部（顔）で表される仮面である一方で、野人は特に中世末の版画に全身像で登場する。たとえばハウスブーフの画家によるドライポイント《一角獣にまたがる野人》（1475年頃）（図63）などがその一例である。この版画の野人は次のように説明される。「野人として知られる想像上の存在は、中世末期の典型的な生き物である。多様な文脈で、野生の中で本能のみに導かれて生きる、全身を毛や

²⁹ 同書、20頁。

³⁰ 同書、22頁。

³¹ 同上。

³² 伊藤、前掲書、378頁。

³³ アンダーソン、前掲書、20頁。

³⁴ W-E. ボイカート、前掲書、167–171頁。

³⁵ 同書、93頁。

葉で覆われた人間に出会うことがある。原始的で、暴力的、飽くことを知らない性欲に掻き立てられて、野人というものは罪を擬人化したものだが、自然と調和し、文明に拘束されず、自由で幸福な状態での人類を表す。彼は、恐怖を喚起するが、束縛されない生き方ゆえに、都市民はある種の嫉妬の火を燃やすこともある³⁶」と。



（図63）ハウズブーフの画家《一角獣にまたがる野人》
1475年、アムステルダム銅版画室

こうしてみると、グリーンマンは森の生命力として肯定的に理解され、野人はやはり森の力を秘めているが、危険な存在とされているといえることができる。

ではグリーンマンの仮面は何故に聖堂の中に現れるのだろうか。

聖堂内の仮面について考察しよう。ジャン・クロード・シュミットは、西欧中世社会を「多くの文化的伝統が弁証法的関係に従って分立、対立、結合する〈複合〉社会である」と述べる³⁷。その

ような社会で、仮面は本来キリスト教にとっては否定さるべきものだった。その理由は仮面が仮装と切り離せないからである。仮装は、人間が別の存在に変わる行為である。ところが旧約聖書に「神は御自分にかたどって人を創造された」（『創世記』1：27）とあるように、人間は神の似姿として作られた。それにもかかわらず仮面を被る行為は神の似姿である自己を否定し、別物、偶像になる行為とみなされるのである。したがって仮面を被るのは悪魔的な行為であるというのである。一方で仮面と同様に、悪魔も変身の力を有する。しかし悪魔は別の仮面をつけるわけではない。中世後期に画像などで現れる悪魔は下腹部や臀部に悪魔の顔を見せている。つまり悪魔の仮面は、悪魔自身の複製にすぎないのだ。それゆえ人間が使う仮面は悪魔そのものとは異なる。悪魔とは別種の変身を可能にするというわけである。こうして、西欧中世の仮面は、悪魔とは異なる性質を帯びるものとして容認されるようになるのである。聖堂の外にも、そして聖堂内にも仮面が登場するようになる。仮面は、知的文化と民俗文化のせめぎ合いの刻印を帯びて、聖堂の中に入り込んだというわけである³⁸。

まとめ

通常、ルネサンス時代の聖堂の絵画や彫刻のテーマなどを研究する際、寄進者が判明しているなら、そのテーマやモチーフは寄進者の意図、目的に沿って解釈されるべきだろう。しかし、このアインベック、聖アレクサンドリ聖堂の内陣席装飾は、そのような論理的・合理的な解釈だけを許すわけではないように思われる。

はたしてこの寄進者は、これまで見てきたようなテーマやモチーフにどの程度介入したのだろうか。もちろんいくつかの点で、寄進者の足跡をたどることができる。すでに述べたように、鷲、アネモネ、女性胸像、修道士、ユダヤ人などの諸モチーフはその例だろう。しかし、グリーンマ

³⁶ J.P. Filedt Kok (ed.), *The Master of The Amsterdam Cabinet, or The Housebook Master, ca. 1470-1500*, Amsterdam-Princeton, New Jersey, 1985, p.144.

³⁷ ジャン・クロード・シュミット『中世歴史人類学試論 身体・祭儀・夢幻・時間』渡邊昌美訳、刀水書房、2008年、159頁。

³⁸ 同書、159-179頁。

ンのモチーフはそれでは解釈が困難なのではないだろうか。それゆえに、これまで本内陣席に最も頻繁に登場するモチーフをグリーンマンと指摘し、その意味が考察されたことはほとんどなかったように思われるのだ。

ここで最後に、アインベックという都市がハルツ山地南西に位置することに注目してグリーンマンの意味を推察したい³⁹。ハルツ山地は、先ほど野人のいる地方として名前が挙げられたことでわかるように、いやそれ以上に年に一度魔女たちが集まり「ヴァルプルギスの夜」と呼ばれる魔女の宴を開催するブロッケン山があることで知られているように、怪しげな魔物が彷徨う地域とされていた。その魔物の一つが「森に住む邪悪な存在」としての野人なのである。ドイツには「ローカルデーモン」と呼ばれる野人が各地に存在していた。アインベックのあるニーダーザクセン地方のローカルデーモンにはハッケルベルクという名の野人がいた⁴⁰。元々はブラウンシュヴァイクの国の猟師だったという。このデーモンはハンス・キルヒホーフという詩人が書いた笑話の中で、作者が馬に乗ってアインベックからゾーリングを通過してウスラーに向かっているとき、道に迷ってハッケルベルクの墓にぶつかりそうになったという。そこには恐ろしい黒い犬が2,3頭墓石の脇に横たわっていると伝えられていた。幸いこの作者はそのような恐ろしい亡霊に遭遇はしなかったと語っている。これは猟師と関連するところから、ヨハネス・トリテミウスの分類で言えば、第三種族の野人ということになるだろう。

この伝説でもわかるように、アインベックはハルツ地方の中でも野人のような怪しげな存在を身近に感じられる場所だったのである。とすれば、この内陣席のグリーンマンたちは、そのような恐ろしき野人たちに対する意図をもって作られたイメージでもあったのではないだろうか。植物が

様々な形に変容し、顔と複雑に絡み合うこれらのイメージは、そのような非合理性によってこそ理解できるのではあるまいか。

（図版出典）

図1, 3, 6, 7, 8, 9, 29, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 58, 59, 62 Rolf Gramatzki, *Das Chorgestühl der Stiftskirche St. Alexandri zu Einbeck*, Oldenburg, 2016, Abb. 66, 2, 59, 58, 60, 68, 117, 16, 34, 35, 33, 40, 113, 19, 15, 101, 109, 21, 28, 32, 102, 27, 22, 100, 104, 88, 89, 92, 91, 79.

図60, 61 藤本康雄『ヴィラール・ド・オヌクール
の画帖に関する研究』中央公論美術出版 1991年,
図版12, 57.

図63 J.P. Filedt Kok (ed.), *The Master of The Amsterdam Cabinet, or The Housebook Master, ca. 1470-1500*, Amsterdam-Princeton, New Jersey, 1985, fig.52.

それ以外は筆者撮影の写真である。

³⁹ ハルツ山地などドイツの森に関しては以下を参照のこと。カール・ハーゼル『森が語るドイツの歴史』山懸光晶訳、築地書館、1996年、特に42-57頁。

⁴⁰ W.E. ボイカート、前掲書、68-71頁。

Green Men in the Forest: Observations of the Choir Stalls of St Alexandri in Einbeck

MOTOKI Koichi

(Professor Emeritus)

Einbeck is a small city in the Niedersachsen on the Weser River, and a Hanse City, which at one time possessed a lot of wealth due to its famous beer breweries founded in the 13th century. The choir stalls of St Alexandri in Einbeck are the most important in Germany, because they have the oldest inscription, which informs the reader that Duke Heinrich donated them in the year of 1288.

The choir stalls have eighteen seats, which are comprised of eighteen misericords, thirty-two armrests, and twenty capitals. Fifty of the seventy motifs are foliage with twenty-five of them revealing green men, or masks among the greens.

Green men represent the vitality in the forest. Einbeck is near the Harz mountains, where magical power is said to exist. So the green men of the choir stalls in the St Alexandri may be a symbol of opposition to this magical power.

